

## マルクスの價值法則と生産價格

### 小 引

マルクスの價值法則が果して生産價格の現象を支配するものであるか將又此と調和し難き矛盾をなすものであるかの問題は所謂『平均利潤率の謎』として多く議論せられた處である。エンゲルスが資本論第二卷の序文に於て此の矛盾は第三卷に於て解決されてゐるものである事を豫告して以來此の言葉が世人の注意を喚起し第三卷の出版に至るまで此の問題に關し、レキシス、シユミット、ファイヤーマン、ヴォルフ、ロリヤ等の人々が所見を發表したのである。エンゲルスは第三卷の序文に於て此等の人々の所説を引き一々論評を下してゐる。本篇は第三卷の出版後に公にされた、ゾンバルト、ボエム・バヴェルク、及デイールの三人の有名なマルクス批評に依つて此の問題を検せんとするものである。先づ論評の前に議論の連絡上極く簡畧にマルクスの價值及價格論を紹介し、次にゾンバルトが此の「矛盾」を救はんがために提唱したる思惟の *Hilfsmittel* なる觀念を排してマルクスの價值法則は正しく自然法則的性質を有すべきものなりとした。價值法則の自然法則的妥當性は一にかゝつて價格現象を支配するか否かにある。此に就て諸家の意見を極く簡単に述べ諸家と共に否定的態度をとつたのである。本篇中精神科學及自然科學の法則性に關する問題及精確科學に於ける法則の偏差は法則の矛盾に非らずとする問題は正しく他日更に論究さるべき重要な問題である。

## 一 マルクスの價值及價格論

### 一 價值概念及價值法則

マルクスの價值概念は商品に包含せらるゝ社會的必要勞働時間の概念であり、價值法則は此の價值の實體が交換關係を規定する作用に關する概念である。マルクスに依る經濟的價值は交換現象を規定する或物であり二つの物の此と彼とを相互に代替し得せしむるものである。マルクスはかゝる代替性又は交換可能性を經濟的範疇と呼び富の社會的形式(Mark, Zur Kritik, S. 2)と稱した。故に彼は此の經濟的價值の實體を究明するために交換現象の分析より進み入つたのである。

マルクスは交換客體たる商品を使用價值及交換價值の二つの立場より見、商品の自然形態たる使用價值は個別なものであつて社會的形式でなく従つて經濟的範疇をなさないとして此を除外し獨り交換價值を分析した。交換價值は使用價值交換の等量的關係として現はれる。異なる使用價值が等量關係をなすためには何等か其處に兩者に共通な同質物が兩者に等量に存在せねばならぬ。マルクスは此の同質物が對象化された勞働の外にあり得ないと推論した。マルクスは更に使用價值を作る具體的な利用勞働と價值を作る抽象的な人間勞働とを分ち後者を人間の頭腦、筋肉、神經等の生産的支出であるとし、又複合勞働(熟練勞働)を單純勞働(不熟練勞働)の倍数であると見る事に依つて同質にして同一強度の一般的人間勞働又は平均勞働の概念を得、時間に依る測定を可

能ならしめた。此の一般的人間労働に依つて社會的標準的生産條件の下に生産された商品は社會的必要労働時間を含むのである。此の社會的必要労働時間がマルクスの價值實體をなすものであり、如何なる條件の下に生産された商品も皆此に準じて此の價值を享受する事となる。

價值法則は等量の社會的必要労働時間を含む二つの商品を交換關係に規定する法則である。即ち商品は等量の社會的必要労働時間に於て交換せらる。此處に  $x$  個 A 商品  $= y$  個 B 商品なる方程式即ち價值形態が生ずる。此の價值方程式が展開して B 商品の代りに貨幣名稱を享受した金分量が置かれる時、此の價值形態は價格形態となる、即ち A 商品の價值は價格を以て表明せられる。かゝる故に社會的必要労働時間即ち價值は價格を決定する、價格は價值の現象形態である。純粹な意味に於て生産力の變化に伴ふ價值の變化がない限り價格の變動はない筈である、此の意味に於ては價值法則は嚴正に價格現象を支配すべきである。然しかゝる嚴正さに於て價值法則が行はれて居ない事はマルクスも既に資本論第一卷に於て隨所に此を認め又第三卷の市場價值論に於て愈々明白である。『此の交換比率に於てはその商品の價值が表章され得ると共に又與へられたる事情のもとに、其の商品が讓渡される所の眞の價值よりも、より大なる、又より小なる價值が表章され得る。されば價格と價值大さとの量的不一致の可能性又は價格の價值大さよりの偏差の可能性は價格形態自身の中に存してゐる、此は決して價格形態の缺陷でなく却つて之をして規律が單に無規律の盲目的平均法則として貫流する所の一の生産方法の適當な形態たらしむるものである』(Das Kap. I. S. 66) 又他の個所では商品が需要以上に供給せらるれば價值以下の價格

で販賣せらるゝ事を明かに認めてゐる (I. S. 72-72)

マルクスは價值と價格との偏差の可能が價格形態の中に存してゐるとし此の偏差は『與へられた事情』のもとに起るのである。與へられた事情とは主として、價值形態を價格形態たらしめた近代貨幣經濟時代の著しき現象たる需要供給の關係を指すことは明かである。然しマルクスが『規律が單に無規律の盲目的に働く平均法則として貫流する』と言ふものは、かゝる偏差が長期に亘つて相殺平均する事を意味するものであり、第三卷の市場價值論即ち需要供給は自然的に相殺し價值法則は一の『平衡の自然法則』 das natürliche Gesetz ihres Gleichgewichts として價格運動の中心をなすと言ふ論 (III. I. S. 159-179) に一致するものである。

要之、マルクスの價值法則は需給の平均状態に於て純粹なる活動をなすものである。此法則はかゝる一の真空状態に於て規定せられたものである。而して需給は自然的に相殺すると言ふのであるから價值は常に平均價格と一致する事になる。吾々は資本論第一卷に規定されたマルクスの價值法則をある讓歩に於てかく解釋するのである。次に生産價格に至る準備として餘剩價值及利潤に關連する概念を知らねばならぬ。

## 二 餘剩價值及利潤

$G-W-G'$ の流通即ち販賣せんがため購買する所の流通は $G$ が $G$ よりも大なる故にのみ行はれるものであり $G'$ の中にはある増分が含まれてゐるのである。此が資本化した餘剩價值である。然らば此の餘剩價值は何處から生

ずるか。マルクスの價值法則によりかゝる流通は等價物交換として行はれるものであるから餘剩價値は流通よりは生じない。等價物交換を前提とすれば  $G \rightarrow W \rightarrow G'$  の流通は正しく  $G \rightarrow W \dots W \rightarrow G'$  でなからねばならぬ。然らば問題は如何にして  $W$  は  $W'$  になるかにある。

資本家が購買のために支拂ふ貨幣  $G$  は二つの部分より成る。一は生産機關即ち原料助成材、及労働要具の購買に向けらるゝものと、他は労働力の購買に向けらるゝものである。生産機關も労働力もその價値に於て購買せられる、労働力の價値は労働者の生活資料の生産に要する労働時間である。資本家は此の購買した生産機關と労働力を以て生産を始める。然るにマルクスに依れば生産機關の價値は生産せらるゝ新しい使用價値の中に保存せらるゝのみであつて何等増殖しない。かゝる故に此の部分に前貸された資本は何等變化しない。故にマルクスは此の部分の資本を不變資本と呼ぶ。然らば  $W$  が  $W'$  となるのは獨り労働力に依つてのみである、 $G$  が  $G'$  となるのは獨り労働力の購買に向けられた資本部分に依つてのみである。故に彼は此の部分の資本即ち支拂はれた賃銀を可變資本と呼ぶのである。然らば如何にして労働力は  $W$  を  $W'$  とすか。

労働は前述の如くその價値を以て購買される。假りに此の價値即ち労働者の一日の生活資料に含まるゝ社會的必要労働時間を六時間だとする。然るに資本家は労働者を一日例へば十二時間働かすことが出来るのである。労働力の交換價値は六時間であるがその使用價値は十二時間であり得るのである。生産行程に於て労働力は生産機關の價値を新しい使用價値に保存しつゝ自から新價値を附加する。そして六時間でその價値だけの新價値を附

加する。マルクスは價值形成行程に於ける此の労働時間を必要労働時間と呼び、残りの六時間の労働時間——此の時間は價值増殖行程と言はれる——を餘剰労働時間と呼ぶ、即ちWは此の餘剰労働のためにW'となり餘剰價值を形成する。今、不變資本部分をcとし可變資本部分をv餘剰價值をmとすれば  $W = c + v$  であり  $W' = c + v + m$  である、此の  $c + v + m$  が新商品の價值となる、而して  $\frac{m}{c + v}$  又は  $\frac{\text{餘剰價值}}{\text{不變資本}}$  即ち餘剰價值の可變資本に對する比は餘剰價值率又は労働搾取率である。

資本論第三卷第一章に於て此の  $c + v$  は費用價格なる範疇を受ける。資本家的立場よりすれば  $c + v$  は資本の支出額であり商品生産の費用をなすものだからである。費用價格をKとすれば  $K = c + v$  であり、 $\text{Warenwert} = \text{Kostpreis} + \text{mehrwert}$  となる、而して餘剰價值は可變資本部分のみより生じたものであるけれども資本家的立場よりすれば投下資本全體より生じたものである、餘剰價值は全投下資本に對して考察される時利潤となる、然して餘剰價值の全投下資本に對する比即ち  $\frac{m}{c + v}$  が利潤率である、かくして  $\text{Warenwert} = \text{Kostpreis} + \text{Profit}$  となる。マルクスは尙第三卷第一章の終りに於て費用價格と價值との間に多くの中間價格が存立し得、商品は尙利潤を得つゝ價值以下で賣られ得るものであるとし、かゝる可能性ある故に次に述ぶる生産價格の成立も可能であると言ふのである。(III, S. 11-12)

### 三 生産價格の成立

(I) 資本の組成比率——前述の如く資本はすべて不變資本と可變資本とから成立してゐるのである、此の不變資本と可變資本との割合を資本の組成比率と言ふのである。即ち勞働力と生産機關との割合を價值で表明したものである。此の資本の組成比率は同一の生産域では畧同様であるが生産域を異にすれば偶然な場合を除いて大抵異なるものである。然しながら吾々は此處にすべての生産域に投下せられた總資本の平均的な組成比率を想定する事が出来る、此をマルクスは社會的平均資本の組成と呼ぶ。此を百分率の數式に示せば  $\frac{m}{m+x} \parallel \frac{m}{m+x} \parallel 100$  である。此の社會的平均資本の組成よりも百分率にしてより大なる不變資本とより小なる可變資本とを含む資本即ち  $(m+x)_c + (m-x)_c$  を高次組成の資本 (Kapital von höherer Zusammensetzung)、反對に  $(m-x)_c + (m+x)_c$  の資本を低次組成の資本 (Kapital von niedrigerer Zusammensetzung) とし、社會的平均資本と一致する資本を平均組成の資本 (Kapital von durchschnittliche Zusammensetzung) とする。(III, 142)

然してマルクスの餘剩價值論に依り餘剩價值は可變資本部分のみから生ずるものであるからして比較的可變資本部分多き低次組成の資本は同一額の高次組成資本よりも大なる餘剩價值従つてより大なる利潤を生ずる筈である、例へば餘剩價值率を百パーセントと假定すれば、例へば  $10_c + 90_c$  の低次組成資本は  $10_c + 90_c \parallel 100$  であり、餘剩價值は  $90$  で利潤率は  $90\%$  である。然るに  $90_c + 10_c$  の高次組成資本は  $90_c + 10_c + 10_m \parallel 110$  であり、餘剩價值は  $10 \cdot$  利潤  $10\%$  である今マルクスの掲ぐる表により同一額の資本を投下せる五つの異なる生産域を假定すれば次の如くなる。

資本	餘剩價值率	餘剩價值	商品價值	利潤率
I 80.+20 <sub>0</sub>	100%	20	120	20%
II 70.+30 <sub>0</sub>	100%	30	130	30%
III 60.+40 <sub>0</sub>	100%	40	140	40%
IV 85.+15 <sub>0</sub>	100%	15	115	15%
V 95.+5 <sub>0</sub>	100%	5	105	5%
平均 78.+22 <sub>0</sub>	100%	22	122	22%

即ち同一資本額でも資本組成の異なるに従つて餘剩價值が甚だ異なり従つて利潤率が異なるのである。そして商品は同一費用價格を含むけれども餘剩價值が異なるから價值法則に依つて各異つた價值で販賣せられねばならぬのである。

(II) 平均利潤率の成立——然しながら右の現象は實際ではない。實際今日の事實を見れば各生産域には畧等しい平均利潤率がある。資本は利潤の低い方面から高い方面に移動して一の平均利潤率を持ち來さんとする傾向が存する事は明白である。吾々が資本家として右の表に依り資本を投下せんとする時は必ずや最大利潤率を生ずる第三の生産域に投ずるに相違ない。然る時は利潤率高き處には資本が集中し商品の供給が需要よりも大となり商品價格は價值以下に下り従つて利潤率は低下する。又利潤なき生産域の資本は撤回せられて高い方面に移動す

るから商品の供給は需要より少なくなり商品価格は價值以上となり利潤率は高騰する、かく資本家の競争により利潤率の高きは低くなり低きは高くなり一の平均利潤率が生ずる。右の表による時は22%の平均利潤率となる。然して商品価格は皆その價值と異つたは22となり利潤は餘剩價值と異つた22となるのである。かく費用價格に此の平均利潤を加へた122が生産價格である。費用價格が同一であれば生産價格の成立に依つて資本の組成比率如何に不拘、従つてその生産する餘剩價值の如何に不拘、同一利潤が生じ價值と異つた同一價格が形成される。かくて同一額の資本は組成比率の如何に不拘同一額の利潤を實現する。右の表の最後の階段は社會的平均資本であるが、かゝる資本が實際に存する場合のみその價值と生産價格とは一致し餘剩價值と利潤とは一致する。右の現象を更に表に示せば

資本	餘剩價值	商品價值	生産價格	利潤	利潤率	價值と價格の差
I 80.+20。	20	120	122	22	22%	+2
II 70.+30。	30	130	122	22	%	-8
III 60.+40。	40	140	122	22	%	-18
IV 85.+15。	15	115	122	22	%	+7
V 95.+5。	5	105	122	22	%	+17
合計	110	610	610	110		0

マルクスの價值法則と生産價格

此の表に依つて見る如く價值と生産價格とは異なるのであるが、その偏差は相殺する。即ち或る處では價值以上であるだけ或る處では價值以下であり  $2+7+7=26$ ,  $8+18=26$  となり平均する、そして價值の合計と生産價格の合計とは一致し餘剩價值の合計と利潤の合計とは一致するのである。かく生産價格の價值よりの偏差は場所的に見れば相殺するが、然し永久的の偏差である。此の生産價格が各生産域に於ける價格變動の中心をなすものであつてアダム、スミスの natural price リカルドの price of production と同一のものである。マルクスは市場價值論に於て需要供給は自然的に一致すると言ふけれども生産價格論の當然の歸結としては、高次組成の生産域では常に需要が供給より大で低次組成の生産域では常に供給が需要より大であり需給は平均しない。生産價格は永久に價值と乖離し商品は價值と異なる價格に於て販賣せられる。而して此の生産價格を成立せしむるものは資本家の競争である。

(III) 生産價格と價值法則に就てのマルクスの辯解——價值法則と生産價格とを如何に調和せしむべきかに就てはマルクスにも甚だしき焦慮があつたと思はれる。然し彼の辯解は論者の誰もが嘆じてゐる如く不明瞭である。『此の場合の平均利潤率は中間組成(平均組成)の生産域に於ける利潤率に外ならない、利潤率はかくしてすべての生産域に於て同一である……かくしてすべての異なる生産域に於ける利潤の合計は餘剩價值の合計と同一であり、又社會の總生産物の生産價格の合計はその價值の合計と同一である……かくの如くして生産價格をして價值の單なる變形 (Jloss veränderten Formen) たりしめんとする傾向又は利潤をして單純に餘剩價值たらし

めんとする傾向が必然的に行はれてゐる。』(III, S. 161)『平均利潤の合計は餘剩價値の合計と同一である。此の平均利潤を費用價格に加へる事に依つて齎らされた價格は生産價格に變形された價値に外ならない』(S. 163)要するにマルクスの意は總生産價格と總價値と而して又總餘剩價値と總利潤とは一致し或る處で價値以上で販賣せらるゝだけ他の處で價値以下に販賣せらるゝ故に價値法則は生産價格を支配し生産價格は價値の單なる變形であると言ふ點にある。

然しマルクスも『商品がその價値で賣られる事と、同一大さの資本に對して同一大さの利潤を齎らす生産價格で賣られる事とは全然異つた二つの事である』(S. 163)事を認めねばならなかつた。マルクスはかくして生産價格が成立しない資本主義以前の社會即ち各労働者が自から生産機關を所有してゐた時代又近世に於ても自作農或は手工業者の職人組合が存してゐる場合の如きに於ては完全に價値法則が行はれて居り各生産者はその資本の組成の異なるに従つて異なる利潤を獲得してゐたと主張する。それは資本の競争がなかつたからである。何故なら各生産域に固定せられた生産機關は甚だしき困難を以てのみしか他の生産域に移動せしめられないからである。(S. 164—166) 生産價格成立のためには信用制度が發達し *Handelsfreiheit* が存して居り又労働の内容が單純化する事に依り労働者が一の生産域から他の生産域に移動し易からねばならぬ。(S. 176)

要之、マルクスはかく歴史的に見て生産價格成立の以前に價値と價格とは一致してゐたとする。即ち現在では價値と價格とは理論的にのみしか一致し得ないが生産價格成立以前には『理論的にのみならず歴史的に』一致し

てゐたと言ふのである。

マルクスの價值及生産價格論は大體以上の如きものである。價值と生産價格との乖離は價值法則を破る事なくして調和されてゐるものであるか。果して『價值法則を侵害する事なきのみならず否寧ろその基礎の上に同一の平均利潤率が打建てられ』(Das Kap. II. Engels Vorwort XXII.)たのであるか。價值と價格との偏差は果して如何に解釋さるべきものであるか。以下吾々の論評せんとする處のものである。

## 二 價值法則は自然法則的性質を有すべし

### 一 經濟學的思惟の補助手段としての價值概念——ゾンバルトの提唱

商品の價值はその包含する社會的必要労働時間に依つて決定せられ、商品はその價值に於て交換せらるゝとなすマルクスの價值法則が自然法則的であるか將又次にゾンバルトの主張する如く單なる經濟學的思惟の補助手段に過ぎざるものであるかの問題はマルクスの價值と價格との關係を批判するに當つて先づ決定して置かねばならぬ問題である。若しそれ此の法則が自然法則的性質を有すべきであるならば商品價值はある正確さに於て商品價格を支配せねばならぬ。然るに、ゾンバルトの言ふ如く經濟現象の認識上に於ける單なる補助手段であるならば價值法則が現實に價值を支配せずとも何等の矛盾をも構成するものではない。マルクスの價值法則が自然法則で

あるとすれば價值と價格との乖離に就てマルクスは責を負はねばならぬ。此が自然法則と異なるものであれば所謂マルクスの『矛盾』に就てマルクスの責任はないのである。ゾンバルトがマルクスを辯護せんとするの主眼はこゝにある。

此の問題は初めコンラッド、シュミットに依つて提出せられユーゴー、ランダス、エンゲルス。等の此に對する辯駁があつた。ゾンバルトはその有名な論文 *Zur Kritik des ökonomischen System von Karl Marx* (*Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik* 7. Bd. S. 551-594) に於てシュミットの考へを擴大し併せてランダスの主張をも融合せんと試みた。此のゾンバルトの論文に就て、ホエーム、バヴェルク。カール、デイル等は各そのマルクス批評に於て反對したのである。ゾンバルトは其後(一九〇九年)他の著書 *Das Lebenswerk von Karl Marx* に於て此の問題を更に展開せしめ自然科学と精神科學との根本問題よりして彼の思想を貫徹せんと試みたのである。

先づゾンバルトに依りシュミットとランダスとの言葉を引用する。シュミットは曰く『此價值概念は吾々が質的に異なる商品を計量し得べき大きさ——かゝる大きさとして交換行程に参加する——として認識せんとする時に吾々の思惟に對して欠くべからざるものである』『商品は同質なる抽象的人間労働時間の塊としてのみ比較し得られる。かくして商品は交換行程に於て相互にある割合で代替せられ得る事が理解せられる』と。シュミットの意はマルクスの價值概念が思惟上の必然であると言ふ點にある。此に對してランダスは經驗的立場に即して曰く

『價值法則はシュミットの考ふる如く質的に異なる商品を計量し得べき大さとして表はすために欠くべからざる思惟上の法則ではない。價值法則は寧ろ甚だ現實的な性質のものであり人の經濟行爲上の自然法則にして競争の法則の一面たるものに外ならぬ』と。

ゾンバルトはシュミットの思想を更に大膽に開展してゐる。彼は先づマルクスの價值が現實の何處にも存在してゐない事を説く『價值は資本主義的に生産せられた商品の交換比率の中に現實に現はれない……商品はその價值に従つて即ちその包含する勞働量に従つて交換せらるゝ事なく價格が價值に等しいのは寧ろ全然偶然的のものであると言ふ事は資本主義的生産方法の特質たるものである』更に曰く『價值は資本家的生産者の意識中に生動せるものでも資本家の計算を指導するものでもなく又社會的年産物の分配規準としての役目をなすものでも商品賣買當事者の意識中に存するものでもない。要するに價值は經濟的活動の條件でない』と。かく價值が資本制的經濟生活の現象界に何等の存在をも有しないとすれば價值は全然存在することなきものであるか。

ゾンバルトは答へて曰く『否な尙此處に此の潜在價值に對する一の隱家が殘されてある、それは經濟理論家の思惟である。實にマルクスの價值の特質に就ての Schlagwort があるならば次の句である „Sein Wert ist kein empirische, sondern eine gedankliche Tatsache“

彼は更に此の思惟的事實たる價值の性質に就て曰く『價值概念は吾々の思惟の Hilfsmittel たるものであつて經濟生活の現象を理解するために吾々に奉仕するものであり一の Logische Tatsache である。此の價值概念

の所作は使用財として質的に異なる商品を量的成形として顯現せしむるにある。此の要求は吾々が絹糸や靴磨やを抽象的人間労働の單なる所産であると思惟するに依つて満たされる。而して此等商品は労働量として量的のみ相互に關係する』とゾンバルトは右の如くマルクスの價值概念を經濟學的思惟の補助手段であり一の理論的事實に過ぎないと論斷する。然し此は決してマルクス自身が明かにかゝる思想を發表してゐるものでない事は彼も認めてゐる。たゞ彼はマルクスが價值概念を右の如き意味に理解してゐると思はるゝ個所を資本論の中に數ヶ所指摘してゐる。(III S. 313, 314, III S. 315, 376等)。

此處に問題となるものは多くのマルクス批評家が考へてゐる如くマルクス自身も亦明かにその價值法則を自然法則なりと述べてゐる事である。ゾンバルトは勇敢にマルクスが自然法則的見解を發表せる個所を引用してゐる。例へば、Das Wertgesetz beherrscht ihre (Preis)Bewegung“ (III S. 156) „Das sind die Werte, die hinter den produktionspreisen stehen und sie in letzter Instanz bestimmen“ (III S. 188) „Nur als inneres Gesetz, den einzelnen Agenten gegenüber als blindes Naturgesetz wirkt hier das Gesetz des Werts“ (III S. 417) 其他 III S. 297, 298, III S. 364, 396, 等。

マルクスの價值法則は必ずしも思惟上の事實たる事なくしてマルクスの言ふ如く明かにある現實的意味が與へられてゐる。ゾンバルトは更に思案を進めねばならぬ、曰く『價值概念は吾々が商品を生産物として量的相互關係とに觀念する所に存在する。然しながら吾々が此の價值概念に労働なる内容を與へる事は決して無頓着に

なされたものではない』と、ゾンバルトの此の言葉を分析すれば、價值概念の形式と内容とが區別される。價值概念の形式は量的成形と言ふ事である。而して此の「量」の實質が労働であるか、何であるかの問題、即ち價值の内容問題の前者と區別されねばならぬ。然らばゾンバルトが労働なる内容を認めたのは如何なる理由に依るか。

『吾々は商品を社會的労働の生産物と見做すことに依つてその中にある經濟上客觀的に最も緊要な事實を論證せんとするにある。人間の經濟的存在が主として労働の社會的生産力の發展に基くものである事は明白である……マルクスは自然的生産力と社會的生産力とを區別した後者のみが價值概念の内容として考察さるゝものである』  
 『物的に規定せられたマルクスの價值概念は經濟的存在の基調をなしてゐる社會生産力なる一の事實に對する ökonomische Ausdruck である』と、ゾンバルトは労働の社會的生産力を人間の經濟的存在の根本的事實として價值概念の内容に取入れたのである。然して曰く『右の概念を價值の内容とする故に價值法則は資本主義的經濟制度に於ける法則として普遍的な内容を有する事になる。商品の價值は最後に於てすべての經濟現象を支配する特殊の歴史的形式である。労働の社會的生産力の程度及其の變化等は生産者又は經濟行爲をなせる個人の意識に上る事なくして價格や餘剩價值率や要言すれば經濟生活のあらゆる形態を最後に於て決定する所のものである……かくして予はシュミット及ランデスに具體化された對立は調和さるべきものと思ふ。價值概念は確かに思惟の補助手段である、然し經濟的生活に對して決定的な客觀的事實たる社會的労働の生産力を價值の對象となすことに依つて價值法則は事實全經濟生活を支配せる法則否な寧ろ統判的原理 regulierenden Prinzip たるものであ

る……かくしてマルクスの體系中に於ける矛盾、即ち商品價値は現象中の何處にも顯はれず又經濟行爲者の意識の何處にも存しないのであるが而も尙經濟事象を最後に於て統制し支配すると言ふ矛盾が解決せられる。吾々は價値に就て何ものも經驗しない。價値は私かにその作用をなすのである。(III, S. 404) 價値は隱密の原因であり (III, 405) 價値法則は 'inneres Gesetz' である』と。

ゾンバルトが勞働を價値の内容とした理由は勞働の社會的生産力が經濟上客觀的に最も緊要な事實であり此の事實が經濟生活のあらゆる形態を最後に於て決定し支配してゐるからである。かくして彼はシュミットとランデスとも調和し得たりとなすのである。曰く價値概念は確かに思惟の補助手段であるが價値法則は經濟生活の統制的原理であると。吾々は此の點に就て充分の論究をなさねばならぬ。先づポエーム、バヴェルク及デイールの所見を聽く。

## 二 バヴェルク及デイールの駁論

ポエーム、バヴェルクはゾンバルトの思想に對して次のやうな意見を彼の卓抜なマルクス批評 *Zum Abschluss des Marx'schen System (Festgabe für Karl Kautsk. Eng. Translation; Karl Marx and the Close of his System* 以下引用は英譯に依る) の中に述べてゐる。

マルクスはその價値論を始むるに當つて現實なる交換關係より出立してゐるのである即ち *one quarter =*

鐵 one cwt. なる方程式が作らるゝのは同量なる共通の第三者が兩者に存在するからであり此の第三者は勞働である。若しこれゾンバルトの言ふ如く價值概念が單に思惟的存在たるに過ぎないならば彼は同量なる共通要素が交換せらるゝ物の中に存在してゐると言ふマルクスの論決を許容する事は出来ない。然らずんば方程式を構成せる兩商品に存在する同量の共通要素は勞働でないとの結論に到達すべき筈である。(P. 195)

次にマルクス自身は彼の價值法則が自然法則的である事を信じてゐたのである。『價值法則は重力の法則の如くに働く……』(S. 52)『此は當然價值がその價格運動の中心點である事を證するものである。』(III, S. 156)と述べてゐる。此は既にゾンバルトも引用する處であるが、かゝるマルクスの見解はゾンバルトの解釋に反するものである。若し夫れ『マルクスが彼の價值法則に對して事實上にでなく單に思惟上に於てのみの眞實性を求めたとすれば彼が價值法則は一方に價格運動を支配し他方に生産價格自身をも支配する故に此の法則は生産價格の成立に不拘、現實の交換關係を支配するものであると言ふ事を證明するためになした努力には一體何の意味があつたのであらうか』(P. 193)と。以上の如くバヴェルクはマルクス自身がその價值法則を現實より出立せしめ此を自然法則として現實に證明せんと努力した事を指摘した。

更に、ゾンバルトが價值概念を一方思惟の補助手段とすると同時に他方經濟現象の背後にあつて此を統制せるものであると論ずるに對してバヴェルクは曰く『ゾンバルトはマルクスの價值が事實の驗證に立たない事を許容し經濟理論家の思惟の中に此の outlawed value の隱家を求めた。然しながら彼は計らずも現實の世界に巧妙

な抜出しを試み價值概念は客觀的に最も緊要なる事實に適合するものなる事を主張し『人間社會の經濟的存在を客觀的に支配せる事實の經濟表明』であると言ふのである。

『問題は—か又は他かの問題である。マルクスの價值が現實の事實に適合する事を要求するならば大膽に此を肯定するの途に出づべきであつて完全なる事實の驗證を避くるために「思惟上の補助手段」なる贅濠を築くべきでない。若し又價值が此の贅濠の中に保護を求めんとするならば事實の驗證は避けられる。此の場合に於て間接的の手段を以てある具體的意義を曖昧に肯定せんとする事は不可である』(p. 207—208)バヴェルタはかくゾンバルトの行論の矛盾を指摘し更に論法を改めてゾンバルトが勞働の社會的生産力よりして勞働を價值概念の内容とする事を批判してゐる。此は價值學說に於ける所謂客觀派と主觀派との論争であつて他の個所に於て論ずべき問題である。

次にカール・テイルもその著 *Ueber das Verhältnis von Wert und Preis im ökonomischen System von Karl Marx* に於てゾンバルトの見解に反對してゐる。その論據はゾンバルトの見解が『マルクスの著書的全精神に合せざる』(S. 9) に在る。即ちテイルはバヴェルタと同じくマルクスがその價值法則を自然法則なりと思惟してゐたのである事を指摘してゐる。例へば『社會的必要勞働時間は支配的自然法則として *Gewaltsam* に行はれる』『市場は絶えず擴張せられてその干渉と此を支配する條件とは益々生産者から獨立した自然法則の形態を取るに至る』(III, S. 226) 其他 I, S. 30 III, S. 157, S. 339, III, S. 183 等を引用して此を證明し『價

値及價格の關係はゾンバルトの意味するよりも遙かに密接なものである『(S. 9)』と論じ又シユミットが前掲のやうな思想を發表した時、エンゲルス、ランダース、ラハアルグ等のマルキシスト自身が此に反對した事を附加してゐる。然して曰く『各の價值説に對する試金石は此が無限に紛亂錯綜せる個々の價格現象に對して Hegel を與へ得るか否かにある。價值論は此れ以外に目的を有つ筈がない……價值法則はすべての價格形成に對して決定的なる又その基礎となる諸要求を示さねばならぬ』(S. 4)と。

かくてデイールもバヴェルクと同一見解を持ってゾンバルトの所謂思惟上の補助手段としての價值概念を排斥し價值法則は常に現實を支配するか否かに依つてその正否を検すべしとなすのである。

### 三 精神科學一般の法則性に關する問題

吾々は更にゾンバルトの Das Lebenswerk von Karl Marx の一章 Was K. Marx für die soziale Wissenschaft leistet に於て彼の思想を如何に發展せしめてゐるかを見る事とする。彼は此書に於て一步を進め自然科學と精神科學(又は人間科學 Menschheitswissenschaft)とを區別し前者の法則と後者の法則との根本的に異なる所を明かにし『自然科學上の法則は認識の成立を表はすものであるが……社會法則 soziale Gesetz は此を以て認識に到達する technische Apparat に外ならぬものである』(S. 44)と言ふのである。

自然科學及精神科學の區別に就ての彼の大體の意見は次の如きものである。

此の兩科學の根本的差異は認識目的又は認識の Artcharakter の差異に根ざすものでない。最近の研究（リツカートなどの研究を指すものと思はるゝ）は吾々に根本的に異なる二つの認識歸趨（Erkenntnisziel）のある事を示す、即ち Einzigkeit の認識と Allgemeinheit の認識である。然しながら此の二種の科學的認識方法は人間思惟の何れの範圍にもある。即ち自然科學も『歴史的』認識をなすことがある。例へば地球史動物史等の如きである。又人間科學も『自然科學的』認識を用ふる。例へば市場論貨幣論の如きである。故に人間思惟の二つの範圍の根本的區別は認識歸趨の差異にあるのでなく認識素材の差異より生ずるものである。（S. 37）かくしてゾンバルトは兩科學の差異を認識目的又は認識方法に求めんとする最近の學說に反對し此を Stoff の差異より生ずるとなす。曰く『吾々は自然を ewig gleich なものとしてのみ考察することが出来る。成程降雨は決して ewig なものではない、それで價格形成の現象と同様に歴史的現象たり得るのである。然し吾々はその降雨を常に同じ働きをなせる力（gleichbleibenden Kraft）として、世界を滿たせる同一の化學的、物理的過程のある一定の顯現として恒久態の内に觀察するのである……然るに吾々は人間行爲をかゝる自然力の發現として考察することは出来ぬ。何故ならば吾々は此の自然力から人間行存の中にある特殊の活動力を説明する事が出来ぬからである。』（S. 38）即ち人間行存を支配する力は gleichbleibende でない。此處から兩科學の認識方法及認識成果に根本的な差異を生ずる。

認識方法に於て自然科學は Entseelung 及び Quantifizierung に向ひ人間科學は Beseehung 及び Qualifizierung

に向ふ。認識の成果たる法則に於ては、引力の法則の如き自然法則はその働く力が常に *regulär* であるから永久不變である。然るに精神科學に於ける力は絶えず變化してゐるから普遍妥當性を有する『法則』の樹立は不可能である。『吾々はある一の動機(例へば出来る丈け高く賣り出来るだけ安く買ふ欲望)を思惟上に於て討究し此の假説を恐らく全然現實に働かない法則に組立てる。此の法則は認識でなくして認識の準備たるに過ぎない』

(S. 44)

自然科學上の法則は實に認識の對象であるが精神科學上の法則は *wirkliche Erkenntnis* の補助手段たるに過ぎない。即ち精神科學上の法則は認識の最後でなくして認識の最初なのである。『社會學や經濟學やが歴史と異なる所以のものは認識の *systematische Art* である。然し此の組織は唯一の人間歴史の過程をよりよく理解するための補助手段として奉仕するのみである』(S. 41)

ゾンバルトは右の如く論ずる事に依つて經濟學上に於ける法則が決して自然法則の如く正確に現象を支配する事なきを主張し前の論文に於て提出した『思惟の補助手段』なる概念を強く精神科學一般に亘つて論斷した。而して曰く『マルクスの發見した所のものは經濟學の體系を構成する合法性及經濟學的方法の總和でなくして寧ろ此の合法性の背後に固着せる生きた人間である』(S. 42)と言ひマルクスの偉大をミケランゼロ、ベートヘンのそれと比し、近代に於てゾラを以て彼に比すべき唯一一人者とした。

ゾンバルトの此の著の論述はゾンバルトの前掲論文の思想に根據を與ふるものである故に、此の書に對する批

評は甚だ大切なものであるけれども問題が經濟哲學の根本に觸るゝものであつて今此を詳論するの餘裕と準備のない事を遺憾とするのである。此の書に於ける彼の思想の主要な問題は第一に自然科學及精神科學を區別するに當つて最近の學說の如く認識目的又は方法よりせずして認識素材よりする事である。第二の問題は自然力は恒常であるが人間力は變化すると言ふ事である。第三の問題は自然科學の法則は認識の成立を意味するが精神科學の法則は認識の補助手段に過ぎず前者は普遍妥當であり數學的に規定せらるゝが後者は然らず前者は現實的支配をなすが後者は思惟上の假説たるものであるとなし結局するに精神科學の法則は人間歴史の認識の補助手段に過ぎずとなす點である。

ゾンバルトの推論には幾多の缺陷があると思はれるのであるが吾々は第一の問題を他日に譲り、第二の問題は一應ゾンバルトの言ふ處を肯定し自然と人間力との差異を認める事とする。然し、本篇に直接關係ある第三の問題に於て吾々は若干の質問を提出したい。

吾々はある自然科學例へば物理學上の法則が普遍妥當的で數學的であり、經濟學上の法則が比較的然らざる事を認むるのであるが自然科學の一たる動物學上の法則例へば自然淘汰の法則と經濟學上の法則例へば物價の法則とがその妥當性の上に於て如何なる根本的の差異があり得るであらうか。兩者の間に一は現實的支配をなし他は單に思惟的存在に過ぎないとする區別が如何にして存在し得るか。又自然淘汰の法則は動物學の認識の對象たるものであるが、物價の法則は經濟現象認識の補助手段であると如何にして言ひ得るか、吾々は俄かに此の區別を

なし得ない。更に氣象學地質學等の自然科学に於ける法則をとつても同様であると信ずる。兩科學の法則は何れもその科學的認識の對象であり又同時に何れも自然現象及文化現象を理解するに就ての補助手段たり得るものであると信ずるのである。論者は常に兩極端を捕へ來つて此を比較し此處に根本的差異ありとなす。然しながら中庸の二つを取つて見れば遂に兩極端の差も程度の差に過ぎざる事がある。ゾンバルトのなす所又此の如きものはなからうか。力學物理學の如く極めて抽象的の科學より進んで化學天文學氣象學動物學等の如く次第に具象的實質的の學に至るに従つてその對象と此を支配する力とが次第に複合的となつてゐる。従つて法則も次第にその單純性と數的規定性とを失つて來て居り普通の認識は次第に個別の認識に移り來つてゐるのであるが兩科學及びその法則の限界標は何處に建てらるべきであるか。

ゾンバルトが精神科學と自然科学との差異よりマルクスの價值法則の非實現性を論證せんとした事は恐らく失敗である。何故ならば經濟學上のすべての法則は決してかゝる單なる思惟的存在でないからである。物理學上の法則の如き妥當性と數的規定性とを有せずとも必ずそは現實に即して居り現實を支配して居る。吾々は再びマルクスの價值法則に歸る事とする。

#### 四 價值法則の自然法則的性質とマルクスの價值認識に於ける普遍化的態度

ゾンバルトに依れば、價值概念は異質の商品を同質の量に還元せんとする要求より生ずる思惟上の事實であり

その同質物が労働時間である。自分は此の量的還元又は數的認識の要求を經濟的價值概念に於ける形式寧ろ先驗的形式たるものとし労働を以てその内容、而して經驗的事實であるとするのである。經濟的價值、即ち交換價値は比較的、相對的價值であり同質者間にしか存立し得ない筈である。故に異質の商品が同質の何ものかに還元せらるゝ事は經濟的價值の先驗的又は論理的要求たるものであり思惟的事實である。現實の世界に即せざる論理的事實である。然るに労働は決して先驗的のものでない。此は經濟現象であり經驗的事實である。此の經驗的事實を價值概念の内容とすると否とはそが經驗的現象に吻合するか否か即ち價值現象を支配するか否かに依つて決せられる。吾々が經濟上の價值形式に内容を附與する場合には嚴に此を經驗的事實に徴せねばならぬ。ゾンバルトは言ふ『此の量的還元の要求は吾々が絹糸や靴やを抽象的人間労働の單なる所産であると思惟するに依つて満たされる』と。然しながら吾々は經驗に照合する事なくしてかゝる思惟をなすことは不可能である。かゝる故にポエーム、バヴェルクは曰く『ある任意の科學的目的に、ある任意の抽象を適合せしむる事の出来ない事は恐らく吾が尊敬する論敵ゾンバルトも認める所であらう。例へば種々なる *Dodies* を「*masses* に外ならぬ」と概念したとする。此は確かに力學的問題に於ては適切であるが音響學的又は光學的問題に關しては明かに許容すべからざる事である……此の例は科學に於て「思想」又は「論理」が事實から遠く離るゝ事の出来ない事を説明するものである』(前掲書、p. 203)と。吾々はゾンバルトが價值概念の先驗的なる部分と經驗的なる部分とを混同し、すべてを思惟的存在なりとする事の誤りなるべきを信ずる。價值概念の内容は此を經驗に徴せねばならぬ。

然し果してゾンバルトは勞働を價値の内容とするに際して經驗に顧みざるを得なかつたのである。彼が勞働を價値の内容とした理由は勞働の社會的生産力が現代の經濟現象の支配的な力となつて居り同時にマルクスの思想の中心を形成してゐる事である。實に此の論法はバツエルクの言ふ如く『此の避難所（經濟理論家の思惟）から現實の世界へ巧妙な拔出』しをなすものであり、その論が前論と矛盾に陥る事及その行論の朦朧たる事とに責を負はねばならぬ。勞働の社會的生産力は彼の言ふ如くマルクスの經濟學說の中心をなすものであり又唯物史觀の核心たるものである。事實吾々も生産力が經濟現象の主要な支配的原因である事を認める。かゝる故にゾンバルトは勞働の社會的生産力は『經濟生活のあらゆる形態を最後に於て決定する』と言ひ『價値法則は事實全經濟生活を支配せる法則否な寧ろ統制的原理たるものである』と論決したのである。

ゾンバルトが先に價値は何處にも存在せずと言ひ而も後に至つて價値法則は統制的原理なりと言ふ行論は甚だ巧妙を極めてゐると言ふよりも調和すべからざる二つの結論をたくみに言ひ紛らしたものと云ふの近きを信する。彼は價値概念と價値法則とを使ひ分け前者は思惟的存在であり後者は經驗的存在であるかの如く言ふのである。然し價値概念は價値の實體に關する概念であり價値法則は價値の作用に關する概念である。然して價値實體の經驗的存在なくして價値法則ある事はない。經驗的法則が存在すれば必ずその實體は經驗的存在をなす筈である。兩者は同一の世界にあるべくして別の世界にある事は出来ない。

要之、勞働なる經驗的事實を價値概念の内容となす時は、その價値法則は自然法則的性質を享受する。よし所

謂文化科學に於ける法則が自然科學のその如き恒常性と單純性とを有せざる事が事實であるとしても此は現實を統制するものでなからねばならぬ。而して此の法則がある正確さに於て現象を支配しないとすれば其處には他の條件が此に影響してゐるのである。此の他の條件例へば『使用價值』又は『競争』等の如きものが價值法則の認識に於て無視し得らるゝものであるか、又は『他の條件が等しければ』なる句を以て留保さるべきものであるか否かは價值内容の批判に譲らねばならぬ。

最後にマルクス自身の態度に就て論ずるに、マルクスの行論にも此等の批評家が齊しく嘆じてゐる如く不明瞭な個處が多く存するのであるけれども彼がその價值法則を自然法則的に解釋し認識せる事はバヴェルク、デール等の指摘せる句に依つて明白である。又マルクスが社會的必要労働時間の概念を構成するに當り、利用労働より一般的人間労働を抽象し複合労働を單純労働に還元し單純労働を『人間の筋肉神經頭腦等の一定の生産的消費』となす所は全く自然科學に於ける Quantifizierung 及び Entseelung の方法と趣を一にするものである。而して曰く『商品を労働時間に分解する事はすべてこの有機體を氣體に分解すると等しき抽象であり又等しく眞實である』時間に依つて測定せらるゝ労働は事實に於て異つた主體の労働として現はれないで反つて各労働せる個人が單なる労働の機械として現はるゝのである『經濟學批判の(9)』と。彼はかくして労働機械觀を建てたのである。

マルクスが現實的の事實より出立し自然科學的方法に依つて彼の論を進めた事は明白である。故に吾々もバヴェルク、デール等の見解に従つてマルクスの價值法則は自然法則的性質を有すべきものであると論決する。次

に問題となるものは價值法則は果して自然法則としての妥當性を有するかと言ふ事である。『思惟の世界』即ち天國を逐はれた價值法則の死活は今や一にかゝつて自然法則的妥當性あるや否や即ち地上の生活に適應し得るや否やに存する。

### 三 價值法則は生産價格を支配するや

#### 一 ゾンバルトの批評

前論の如くゾンバルトはマルクスの價值概念を思惟の補助手段なりと解すると同時に價值法則はある蓋然性に於て經濟現象を經濟行爲者の意識による事なく隱密の間に支配せる社會的事實であるとす。而して彼は又餘剩價值を此と同様に解釋するのである。彼によれば餘剩價值概念は利潤の認識上の單なる思惟手段であつて個々の生産行程に於て現實に存するものでない、餘剩價值はたゞ社會全般に於て資本家階級の手に納められた全社會の總剩餘價值として個々經濟行爲者の意識に上る事なき一の社會的事實として存するのみである。彼のかゝる見解は當然に價值と價格、餘剩價值と利潤との經驗的合致を否定するの態度となる。生産價格が價值と異なるものである事は彼の此の見解に剋當するものである。然しながらマルクスが生産價格成立以前に於ては價值と價格とは一致してゐたと言ふ事に資本の競争が起ると共に資本は高次組成の生産域即ち利潤低き方面より低次組成の生

産域即ち利潤高き方面に移動し一般的平均利潤率が成立するに至つたと言ふ價值及餘剩價值法則の實證論に對して否定的態度を取らねばならぬのである。前掲論文によつて彼の所説を見る。

『予は資本論第三卷の若干の箇所に於てマルクスが餘剩價值と利潤との峻嚴なる區別をなすことを止め、兩者の間に經驗的關係を作り出さんと試みたのではないかとの印刻を受けた。此の一例は地代論に於てである。然し就中予の此の印刻を深くしたのは競争に依る一般利潤率の平均に關する論に於てである。此處に於ては次の如き外見が得られる。即ちマルクスの價值が當然あるべき地位たる論理上のみならず又經驗的に或は又マルクスの言ふ如く歴史的に餘剩價值は個々の生産域に於ける資本制生産の出發點であつた。此の出發點から資本制的生産が發足し、かくして事實上、資本の不同一な組成から一般に不同一の利潤が生み出され次第にその不同一の利潤は資本の移動により此に相應する價格の騰貴又は下落の結果一の平均利潤に平均するのである。若し此がマルクスの意見であれば大なる謬想に基いてゐるものである。此の論は論理的に又經驗的に等しく謬つてゐる。』

『論理上より言へば社會的事實たる餘剩價值生産を個人的事實たる *Kostengestaltung* と混合することは資本論の全導的思想からの墮落である』と、即ち此の論は天國にあるべき餘剩價值概念を地上に引き下すものであつて論理的に謬りだと言ふのである。ゾンバルトは更に論を進めて曰く、

『此の論は又經驗的に誤謬である。何となれば産業の發達が常にかくの如き方法で行はれるとするならば新しく起つた各産業域に就て此の場合が存せねばならぬ。即ちマルクスの見解が正しいならば資本主義の發達を歴史的

に見る時は明かに資本主義は先づ *lebendige Arbeit* の優つてゐる生産域即ち平均以下の資本組成の生産域を占有し而して次にその第一の生産域に於ける生産が急に増大し價格が低下するに従つて漸次他の生産域に移動するであらう……然しながら資本制的生産は歴史的に見て一部分は直ちに後の種類の生産域に發達したのである。採掘業の如きは是である』と、更に彼は現在の状態に論究して曰く『利潤率と餘剩價值率とを經驗的に結付ける事が歴史的に即ち資本主義の初期に徴して誤りである如く又發達せる資本制的生産の状態に於ても更に一層誤りである。今日、高次或は低次の資本組成を以て一の事業を開くとする、然る時はその生産物の價格決定及利潤計算は全然資本支出の基礎の上に行はれる。然して昔でも今でも事實に於て資本は一の生産域から他の生産域に移動するのであるがその主たる理由は確かに利潤率の不平等に存する、而し此の利潤率の不平等は資本の組成に基く非ずして何等か競争に依る原因に基くものである。今日でも繁榮せる生産域の一部は甚だ高い資本組成のもの例へば鑛山業、化學工業、ビール醸造業、汽罐製造業等である』と、ゾンバルトはかく生産價格以前にも價值と價格とは一致せず又平均利潤率は決してマルクスの言ふ如き過程を経て現はれたものでなく第三卷第十章はマルクスの經濟學體系の瑕疵たるものであると極論し論決して曰く『利潤率に達するには餘剩價值率に出發點を取らねばならぬ事は理論的當然であらねばならぬが經驗的には全然正當でない』と。

ゾンバルトの生産價格成立に就ての批評は大體右の如きものであるが、吾々は彼の餘剩價值に就ての見解に對しては既に前論に於て經驗科學の概念構成が經驗を離れてあり得べからざる事を論じ彼の價值概念を斥けたと同

一の態度を持つるのである。マルクスが第一巻に想定した價值及餘剩價值を經驗的事實に於て論證せんとする事はマルクスの當然なすべき責務であり又經驗科學の性質上論理的當然の事である。

資本家の意識に上るものは餘剩價值でなく利潤である事はマルクスも又充分に説く所である。然して資本家組成が異なれば餘剩價值が異なり従つて利潤率が異なる。そして資本家の誰でもより大なる利潤率の生ずる生産域に資本を投下する筈である。此の經驗的事實が否定されるならば同時に餘剩價值論が否定されねばならぬ。ゾンバルトの矛盾は此處にある。ゾンバルトが『利潤率に到達するには餘剩價值率に出發點を取らねばならぬが、經驗的には全然正當でない』と言ふ事の中に彼の認識の根本的な矛盾が含まれてゐる。

ゾンバルトの、資本組成比率の相異より來る實際上の利潤率の相異を經驗的に否定する論は此を實證する事實を明示せず又その行論もあまり正確でない事のために、今直ちにマルクスの所論を全く破つたとする事は出來ないけれども自分は結論に述ぶるが如き理論を有する故に一度此を正當と斷ずる。次にポエーム、バヴェルクの批評を聽く。

## 二一 ポエーム、バヴェルクの批評

『資本論第一巻に於てはすべての價值は労働のみに基いて居り、商品の價值はその生産に必要な労働時間に比例するのである……それで一時的な場合の偏差を離れ長期に亘つて見れば同じ量を包含せる商品は原則として相

互に交換せられねばならぬ。然るに今第三卷に於て吾々は第一卷の教へに従ふ筈のものが決してそうであり得ない事を聞かされるのである。個々の商品はそれに包含せられてゐる労働量の割合と異つた割合に従つて交換される、又交換されねばならぬ。此は偶然的な一時的なものでなくして必然的なものであり永久的なものである……予は此の矛盾に就て何等の説明も和解もあり得ないでたゞ矛盾それ自身があり得るのみだと信ずる。マルクスの第三卷は第一卷と矛盾する。平均利潤率及生産價格論は價值論と調和し得ないものである』(前掲書P. 63—64)と。バヴェルクはかく彼の結論を前提してマルクスの價值法則と生産價格との矛盾を指摘せんとするのである。彼はマルクスが兩者を調和せんために試みた辯解を四つに分ち一々此を論駁する。

(I) 第一、個々の商品はその價值以上又は價值以下に賣られるけれども此の相互的な偏差は互に相殺して社會全體に於ては生産せられた商品の生産價格の總量はその價值の總量と等しいと言ふ事 (Das Kap. III, S. 138)

此に對するバヴェルクの批評の要點を摘録すれば(A)抑も價值法則の目的は異なる商品が實際吾人の前に提示する交換關係の説明に外ならない。然るに總生産價格が總價值に等しいとせらるゝ事は正しく價值法則の説明對象を逸し去るものであつて個々の交換關係の説明をなすべき價值法則の辯解となるものでない(P. 71—73)(B)『マルクスは生産價格の價值よりの偏差が相互に相殺する事を説いて後曰く「資本制的生産に於ては全體として一般的法則が、非常に綜錯せる状態の中に於て絶えざる變動の絶えざる平均として支配的傾向をなすものである」と。此處にマルクスは二つの甚だ異つたものを混同してゐる。即ち變動の平均と永久的に又根本的に異なるものゝ

平均とを混同してゐるのである。絶えざる變動から結果する平均がその法則と契合する理由で一般法則を支持する事は正當である……然し價值から偏差する生産價格の場合に於ては變動の問題でなくして必然的な永久的な偏差である『P. 75-76』然してバズェルクは此の必然的な永久的な偏差に平均を求めたとしてもそれは何等價值法則に對して意味をなさない空虚な平均だと言ふのである。

疑ひもなくマルクスが互に相殺すると言ふ意味には二つある。一は時間的の相殺であり他は空間的な相殺である。時間的の相殺は一の生産域に於ける價格變動がその平均價格たる生産價格に時間的に平均する事であり、空間的の相殺は異なる生産域間に或は價值以上の或は價值以下の生産價值が生じ此等はたゞ空間的に觀察してみ價值に平均するのである。マルクスの價格論には明かに此の二つの平均が存してゐるのであるが第三卷第十章に於ては此の二つのものが混同されてゐるかの如き觀がある。恐らく此はマルクスが價值に平均すると言ふ事を力説するのあまり一の牽強附會に陥れるものであると信ぜられる。

(II) 第二、商品の生産に要する労働時間の減少又は増加は生産價格を騰落せしむる故に價值法則は價格の運動を支配する事 (III, S. 156) マルクスは他の條件が等しければその生産に要する労働時間の増減は價格を増減せしむる (S. 156) と言ふのである。バズェルクも此を價格決定上の原因として認める。然し此の論點は價值と生産價格との偏差に就て何等の解答を與へるものでないから此處に畧する。

(III) 第三、價值法則は價值の生産價格への轉化が未だ行はれなかつた時代に於ては商品の交換價值を委みなき

「權威を以て支配してゐたと言ふ事 (S. 154-156) 即ち勞働者が各その生産手段を所有する如き社會に於てはその資本組成に應じた異なる利潤率が得られかくして商品はその價值で交換せられたと言ふ事である。バヴェルクはマルクスの第三卷に於ける此の例證が何等事實に基かない假説であり『證明の片影だも否な證明せんとの試みさへも含まれてゐず……マルクスはたゞ彼の理論から演繹したものである』(P. 88) とし資本制なき社會に於ても利潤の相異は生産者に取つて無關心なるべき筈がない事を理論的に反證し又實際に於ては大なる不變資本を有する生産者は何等不變資本なき生産者よりも高い利潤を獲得しつゝありとなす。(P. 96) 然して資本組成の異なるに依る利潤率の差異は過去に於ても亦現在に於ても存在せずと主張したゾンバルトの前述の論に同意してゐる。此處に於ては此の二人の論敵は一はマルクスの價值概念を天國に救はんがため他は此を地上に蹂躪せんがために奇しくも意見を等しくするのである。

(IV) 第四、價值法則は複雑な經濟組織内に於て生産價格を少くとも間接に且つ最後に於て統制する。何となれば價值法則に依つて決定せられた商品の總價值は總餘剩價值を決定する。然して總餘剩價值は平均利潤の高を従つて一般利潤率の高を支配するからである事(目 7 の I 28) 此に對してバヴェルクは價值は生産價格決定の一要素に過ぎざるもので、他に價值に關係なき決定要素がある事を主張する。バヴェルクは第一問に於て總價值と總生産價格とが一致する故に價值法則は生産價格を支配すると言ふ事の無意味なるを論じ此の第四問に於て生産價格の決定要素を探り價值法則が生産價格を決定すると言ふ事の甚だしく間接的なる事を難するのである。

バヴェルクは一商品の生産価格をその前身に溯つて賃銀額の總和と平均利潤の總和とに分ち、第一に價值に關係なき賃銀率(マルクスに依れば80. + 20. + 20. = 120の場合賃銀率が騰貴して20. が25. となれば80. + 25. + 15. = 120となり價值に變化を來さない)が直接に生産價格決定の一要素となる事を説く(P. 107-108)次に又總價值が總餘剩價值を決定し總餘剩價值が平均利潤を決定し平均利潤率が平均利潤とてゐるまでには又價值に關係なき賃銀率、社會の總資本、及一生産域に於ける資本額等が各一決定要素として共働するものであり價值と生産價格との間の因果關係は甚だ疎遠なものであると言ふのである。バヴェルクの此の論は大抵マルクス自から認めてゐる所であり特に賃銀率の生産價格に及ぼす影響は第三卷第十一章に詳論されてゐる。バヴェルクの推論はあまりに缺陷を漁る事に微細にして時に正鵠を逸してゐるものであると信するのであるが、重要でない故に此處に詳論する事を止める。吾々はすべてを結論に譲り更にデイルの批評を見る。

### 三 カール、デイルの批評

デイルは主としてポエム、バヴェルクが殆ど觸れなかつた競争需要供給等の方面からマルクスの價值及價格の關係を批判しやうと試みる。彼は先づ平均利潤率の成立に就て論評する。曰く

『此の利潤率の平均を致さしめるものは何であるかと言ふにマルクスに従へば競争である。マルクスは曰く「此の異なる利潤率は競争に依つて此等すべての利潤率の平均なる一般利潤率に平均せしめられる」(III, S. 136)

……又曰く「資本は利潤の低い方面から引出されてより高き利潤を生ずる方面に投ぜられる。此不斷の流出入に依つて資本は幾多の生産域に於ける平均利潤を同一ならしめ従つて價值を變じて生産價格たらしむる如き需給關係を作り出すのである」(Hilf's. 126)と、吾々はマルクスの資本論全三卷の内確かに此以上の論究を以て最も薄弱な最も不満足のものとしてよし。即ち此處に於ては有名な平均利潤率の謎が解決さるべきであるのにマルクスは此の困難を排除する事なくして、此を回避してゐるのである。同額の資本が異なる分量の生きた労働を適用するに不拘、同額の利潤を生ずると言ふ事は如何にして起るかを説明されねばならぬ……生きた労働のみが餘剩價值の形成をなすのであるから利潤が平均すればそれは價值法則を侵害する事となるのであらう。然るに此矛盾を解決せんがためにマルクスは單純に價格は價值法則に依つては、はなく競争に依つて支配されると説明する。競争は利潤率を平均し同一の利潤率は價格の中に進み入るのである。然り生産價格及一般利潤率の概念は凡て個々の商品はその價值で販賣せられないと言ふ事に基いてゐる。然して此は單に價值法則は價格を支配せずとの承認を含むのみならず更に又究極に於て價格を支配するものは労働量でなくして生産費だと言ふ、マルクスの學說とは全然矛盾する一の事を含んでゐる。此見解を押し詰めて行けばマルクスは生産費說に到達しなくてはならなかつたであらう。何故ならばマルクスは自から商品價值の一部即ち利潤は可變資本のみに依らずして投下資本總額に依つて決定する事を認めて居り従つて價值及價格の尺度を決定するものは労働のみでない事を承認しなくてはならぬ筈だからである『前掲書の 161—77』。デイルはかく平均利潤率が競争に依つて齎らされる事は價值法

則を破るものであつてマルクスは正しく生産費説に行くべきであつたと論ずる。かくして曰く『マルクスの取るべき道はたゞ二つある。即ち經濟學上の概念としての價值は斷じて、價格問題認識のために用をなさぬと言明するか或は價值學説は間違つてゐると言明するか孰れかである』と吾々は前論に於て既にマルクスの價值法則が價格現象を支配すべき自然法則的性質を有すべき事を論じたのであるから『價格問題認識のために用をなさぬ』と言ふ事は『間違つてゐる』と言ふ事である。マルクスに残された道は此の道一つであるか。

次にデイルは實際に價值法則が支配すると思はるゝ三つの場合を擧げて論評する。(S. 17-19)

(A) 一の生産域に於ける資本の組成比率が宛も社會的平均資本の組成と一致する場合、デイルは此の場合が全く偶然的にしかないものであるから論外に置くとし、(B) 次に短期間の價格變動の場合を擧げる。生産價格の變動は長期間に亘つて始めて現はれるものであるから短期間の變動は價值の變動に依るものだと一應デイルは推論する。然し此の場合はデイルの批評を待たずして明かに誤りである。價值の變動に依る場合もあるけれど短期間の變動が主として需給の關係に依つて起る事はマルクスも認めてゐる處である。(C) 資本制的生産以前の經濟狀態即ち平均利潤率成立以前の狀態に於ける場合、此の點に就ては前論の如くゾンバルトもポエーム、バヴェルクも共に否定する處である。デイルはマルクスの所論に對するエンゲルスの解説をも引用し並せて論評して曰く『假りに此の論が正しいとしてもマルクスには此を援引する事は許されない。何故ならば彼は明白に發達せる資本制的生産方法をその餘剩價值論の前提としてゐるからである……マルクスのこの論究と此に加へたエンゲルス

の解説には事實上マルクスの價值法則は正しく經濟史上のある時期即ちマルタスが専ら分析した資本制的生産法の時代の開始と共に停止したとの告白が含まれてゐる『S. 16』デイルは尙ヴェルクの所論に同意しマルクスの此の論が事實と矛盾する事を主張し論斷して曰く『何れにしても資本制的經濟制度の下では價值は大部分はマルクスの價值法則に依らずして價值法則から離れて形成せらるゝ事は確かである。故にマルクスが「價值が變じて生産價格となると共に價值決定の原理そのものは見えなくなる」(III, S. 147)と言つたのも正當ではない、寧ろ此の價值が變じて生産價格となると共にマルクスの價值決定の原理その者は否定せられると言つた方がより正しいであらう』(S. 20)と。デイルは更に詳細に市場價值及價格論を論評しマルクスの價值と價格とが一致しない事、而して又需給の相對的關係を離れた絶對的價值の存し得ない事を説くのであるが此處に之を略する。

#### 四 結 論

自分は既に諸家の批評を更に論評しつゝ自から愚見を述べたのであるが今此處に上述の批判を總括する。

生産價格と價值法則との關係を論結する前に吾々は先づ一の現象としての生産價格、又は平均利潤率が眞實に存在するやを確かめねばならぬ。何故なら吾々は今生産價格なる一個の事實を以て價值法則の妥當性を計らんとするからである。生産價格論の要點はすべての生産域に同一の平均利潤率が成立すると言ふ事である。吾々は各生産域に於てその利潤の屢々變動しその相互間の利潤にも甚だ相違があるけれども各生産域の利潤率の變動を各

平均して見る時は恐らく、畧相等しき平均利潤率に到達するであらう。よし其處に、ある生産域の利潤率が異なるものありとしても、商業自由と信用制度との確立せる相當に發達せる生産制度に於ては資本は低き利潤率の生産域から高き生産域へ流動し其處に利潤率の平均を齎らさんとする傾向の存する事は疑ひなき事である。かゝる故に吾々は平均利潤率に従つて生産價格の成立を疑ふべからざる事實だとする。然らば價值法則は生産價格現象を支配し之と調和するのであるか。

(I) 價值法則は平均利潤率を決定するや——價值法則が純粹に作用するならば異なる資本組成の生産域には異なる利潤率が生ぜねばならぬ。然るに此處に平均利潤率が成立するには何か、價值よりの偏差を來さしむるものがなくてはならぬ。此はカール、デイルが指摘しマルクスも充分認めてゐる處の資本家の競争である。デイルは平均利潤率を齎らす動因が價值法則と關係なき競争であるからして此の一點を以てマルクスの勞働價值説は破れマルクスは正しく生産費説に行くべきであつたとする。ポエム、バヴェルクに依れば平均利潤率の決定要素として賃銀率、社會總資本額等が存し價值法則は此等要素と共働して平均利潤率を決言する。かゝる故に價值法則は平均利潤率決定の二要素に過ぎざるもので價值法則が價格を支配すると言ふ事は出來ないのである。

生産價格それ自身を見る時はデイルの言ふ如くマルクスは生産費説に陥れるものであるとの觀がある。即ち資本組成の如何に不拘、餘剩價值の如何に不拘、資本支出の大きさに比例して競争に依つて齎らされた平等の利潤を得るからである。價值決定の原理となるものは正しくその資本支出であつて外の何物でもないと思はるゝ。要之、

價值法則は直接に平均利潤率を決定しない事は明白である。然しながらマルクスには今一つの論據がある。それは總生産物の價值は總生産價格に等しく生産價格はある處で價值よりも高いだけ他の所で價值よりも低く兩者は價值に平均すると言ふ事である。此が恐らくマルクスの牙城をなすものである。

(II) 總生産價格が總價值に等しき事は價值法則の妥當性を保證するものなりや——第一にポエーム、バヴェルクは曰く、價值法則の説明對象は異なる商品間の交換現象である。かゝる故に總生産價格が總價值に等しいと言ふ事が若し眞實であるとするもそれは價值法則の説明對象以外に出づるものであつて吾々の質問に答ふるものではないとする。第二にバヴェルクは價值以下の生産價格と價值以上の生産價格とが價值に平均すると言ふ事の無意味なる事を主張する。即ち永久に價值より偏差せる二つのものゝ間に平均を求めたりとするも事實上何等の平均ともならぬ。即ち價值は少くとも時間的に變動する價格の規準として此を支配せねば價值法則としての妥當性なしとする。かゝる故に價值法則は生産價格を説明し得ずたゞ矛盾あるのみだと言ふのである。かく價值法則は異なる商品間の交換現象に此を適用せんとすれば生産價格と矛盾し商品全體として見やうとすればその説明對象を逸する事となる。

吾々はかくして此處に價值法則は生産價格と矛盾するが故に此は誤謬なりと論結すべきであるか。

然し吾々が此の點に到達して一考すべき事は法則の偏差は常に法則の妥當性を破るものであるかと言ふ事である。例へば引力の法則は空氣中に於てはある偏差を生ずる。即ち物體の落下が空氣中に於てなされる時は真空に

於てなされると大なる相違を來すものである。然し引力の法則は空氣中に於ては誤謬でありその法則は破れたりとなされるのではない。即ち空氣中に於ける偏差は又精確に算出し得られ、原則は原則として引力の法則は嚴存し空氣の偏差は偏差として算出せられる。此と同じくマルクスの價值法則は一の眞空内の法則たる事を意味しないではあるまいか、即ち資本家の競争は引力の法則に於ける空氣の如き地位にあるものではあるまいか。空氣による引力の法則の偏差が永久的である如く資本家の競争に依る價值法則の偏差も永久的である。然してその偏差の度は又引力の法則に於けるが如くある程度まで精確なる算出をなし得るのである。個々の商品の交換現象が價值法則とある偏差に於て行はれるとも、空氣中の物體間の引力現象が引力の法則とある偏差に於て行はるゝと共に許さるべき事ではあるまいか。Fireman が『精確科學に於ては (in den exakten Wissenschaften) 計算し得らるゝ偏差は決して法則の否定として考察すべきものでない』(Das Kap. III. Engels Vorwort XVII) と言ふのは正しく此の意味の事を言ふのであると信ずる。

マルクスが『需給が相殺すれば兩者は何物をも説明し得ず市場價值に作用しない。そして何故に市場價值がある貨幣量に表示せらるゝかに就て吾々に何等の光明をも與へない』需給が作用する事を止めるや否や此の法則が純粹なる作用を始める』又『需給の運動に依つて齎らさるゝ假象から獨立に此の法則を考察する』(III. S. 164) など言ふ意味は明かに彼が一つの眞空状態を考察してゐるものであると思はれる。若しそれ此の解釋が正當であるならばバヴェルクやデイルが口を極めて批評した事の大部分はマルクスの價值法則に何等の傷手をも負はず

ものでない。生産價格の成立は何等價值法則に矛盾するものでないと言ふべきである。それは引力の法則が空氣中にてある偏差をなしてもその法則と矛盾するものでないと同様である。自分は今一應此の論を正當と認め價值法則の偏差を以て價值法則の侵害なりとなすすべての論を撃退するのである。

(Ⅲ) 資本制以前の時代 於ては資本組成比率の異なる生産域には異なる餘剩價值従つて利潤を生じたるか——此處に一つ問題が起る。引力の法則は眞空間に於て實證せられたものである。果してマルクスの價值法則は實證せられたものであらうか。此は恐らくマルクスの價值法則に對する最も重大な質問である。第一卷に於ける價值法則の樹立は皆一の推理からなれるものであり、彼は此を事實に檢證してゐないのである。此が事實に檢證されずして一の假定から演繹される時は確かに一の形面上學に陥る事になる。

然しマルクスは果して眞空内の事實を吾々の前に提示しやうとした。此が即ち資本制以前に於ける状態即ち資本の競争が行はれなかつた眞空状態である。生産價格成立前には商品は價值で交換せられ異なる資本組成の生産域から異なる餘剩價值従つて利潤が得られたと言ふ事である。換言すれば高次組成資本の生産域からは比較的僅少の、低次組成資本の生産域からは比較的多くの利潤が得られ且つ生産制度の發達と共に資本は高次組成より低次組成に移動し遂に平均利潤率が生じたと言ふ事である。此の例證が果して事實であるか否かは恐らくマルクスの價值論の破るゝと否との別るゝ處であり此の事實の否定はあらゆる他の非難よりもマルクスの價值論にとつて致命的である。

此の點に就ては既述の如くゾンバルトが強く之を否定しバヴェルクは第三問に於て此を否定しディールも前者に倣つた。

ゾンバルトは資本主義が必ずしもマルクスに依れば利潤多かるべき生産域に起らずして利潤少なかるべき高次組成の生産域に起つた事を説き又今日に於ても一般に高次組成の生産域即ち莫大なる生産手段を有してゐる生産域に割に高い利潤率が得られてゐると言ふのである。ゾンバルトの此の論は尙疑ひの餘地なき程正確な論ではないのであるが如何にしてもバヴェルクの言ふ如く『昔に於ても今日に於ても一般に、より潤澤な収益は尨大な資本を以て行はれてゐる生産域に生じて』(p. 88)ゐてその組成比率の如何に關しない事は恐らく疑ふべからざる事と思はるゝ。吾々はマルクスの言ふ資本組成の異なるに由る餘剩價值從つて利潤率の相違を信する事が出来ないのである。而して此を信ぜざる事は生きた労働のみが價值を増殖するとせず餘剩價值論を信ぜざる事である。然らば餘剩價值論の如何に缺陷があるか。此の點に關する自分の疑問を一言する。

マルクスに依れば労働の交換價值は労働者の生活資料の生産に要する労働時間——實際は生産價格であるが——に依つて定まる。例へば此を六時間の労働とする。然るに労働力の使用價值は十二時間の労働であり得る。かゝる故に労働力の交換價值と使用價值とを比較して其處に六時間の餘剩労働を生ずるのである。かくして可變資本部分は増殖する。然るに不變資本部分は常に舊價值を保存するのみである。例へば此處に十時間の労働時間で作られた労働要具があるとすればそれはたゞ生産物の中に十時間の労働時間を保存するに過ぎない。即ちマルクス

は不變資本部分に就ては交換價值のみを見るのみである。然しながら例へば此の十時間で生産せられた労働要具を用ふれば生きた労働の二十時間を省暑し得ると假定する。此は労働要具の使用價值である。故に交換價值と使用價值とを比較すれば此處に十時間の餘剰時間がある。かく交換價值と使用價值とを比較する時は労働力の側にも労働要具の側にも同じく餘剰労働がある。即ち労働要具にも交換價值と使用價值との比較が許されるならば遂にマルクスの可變資本及不變資本の區別は消滅し投下資本はすべて價值増殖行程に與かる事となり資本のすべての部分は新價值を生ずるのである。然してマルクスによる資本組成の如何に不拘同様の餘剰價值を生ず事となる。マルクスは何故に労働力のみ<sup>に</sup>交換價值と使用價值との比較を許し労働要具に就て交換價值の一面のみしか許さないのであるか。彼は此を明かに説明してゐないのである。吾々は甚だ遺憾であるが資本の有機組成の異なるに從つて異なる餘剰價值を生じないと言ふ事實からして右の如く餘剰價值論に疑問を抱くのである。

要するに吾々は價值法則と生産價格との關係に就て多くの論評をなしたのであるが價值法則は生産價格を支配せずとの致命的な論點は右の如く資本組成比率の相違より來る利潤率の相違の否定であつた。かくしてゾンバルトの如く餘剰價值論を天國に拉し去らない以上此も否定されねばならぬ運命にある。餘剰價值論が否定せられるばその基礎をなしてゐる價值論も否定されねばならぬ。此は恐らく前述の如き一の生産費説に陥らねばならぬ。吾々の論結は商品は過去に於ても現在に於てもマルクスの價值を中心とする價格に於て賣られた事のない事を證した。然して過去に於ても現在に於ても價格が生産費を中心とせる事は確實である。生産力の増減が價值を變動

せしめる事は確かであるが此は生産力の増減が商品生産に要する労働時間を變化せしむるからだと言ふよりも寧ろ商品の生産費を變化せしむるからである。何れにしてもマルクスの價值概念は多大の修正を受けねばならぬ、マルクスの價值法則はある假定より演繹された概念の幽霊であり現實の世界に於てはたゞ朦朧たる姿を認め得るのみである。労働價值説の何處に欠缺があるかは別に問題とされねばならぬ。(一九二二、二、五)

赤 松 要